

小野谷機工は、大型車用タイヤチェンジャー「ビッグマスター」を一新し本格発売する。シリーズの初代モデルを13年ぶりに大幅リニューアル。「BMT-850(適応リム径16~30インチ、最大タイヤ幅850ミリ)・1250・1250X(ともに適応リム径16~35インチ、最大タイヤ幅1250ミリ)」シリーズとしてラインアップした。



最近、「シン・〇〇〇」という接頭辞を目にし耳にすることが多い。たとえば映画の「シン・ゴジラ」。その接頭辞には「真」「震」「神」といった意味が込められていると言われる。それにならえば、今回新発売する「ビッグマスター BMT」シリーズはさしつけない。

TOR・AGの生産財タイヤにワイドに対応する。坂井さんによると、「BMT」シリーズは従来の開発思想や搭載した機能を継承しつつ、性能を一層進

の皆さまから「これが良いことが悪かったかをくじかれていたかをお聞きし、分析して取り組みました」と、坂井さんは話す。

更し、ハンプのような段差を新たに設けた。坂井さんは「脱着・装着作業時にビード部へ逃がしかたがより的確となり、確実な作業が

機を継承した。ただし、「BMT-850」では標準装備とした。アームには関節があるので、作業中にそれが干渉することはない、操作時・収納時ともにスペース効率に優れる。そのうえで作業のひと手間を省くことが可能だ。

もう一つはコンパクト設計。本体ベースのサイズで、「ORX」シリーズでは幅2480ミリ×奥行2250ミリに対し、「BMT-850」は幅1780ミリ(「BMT-1250X」は幅2050ミリ)×奥行2070ミリ。限られたピット空間で、機器本体が省スペース化されることで、作業範囲や動線を確保しやすくなつた。

◆ 「グレートツール」のアーム台の移動方法

◆ ①「BMT-850」のアーム台とチャック部、②坂井さん、③実演動画が見られるQRコード

◆ ④同レバー部、⑤コントロールボタンを配備。デュアルコントロール仕様で、操作性を向上した。

◆ ⑥操作リモコンのパネルをスイングアームと連結したことがあげられる。

◆ ⑦その後スタンダードとTシリーズは、このよくな次世代に向けた取り組みにも高い「親和性」がある。

# 整備機器

## 新商品

### 小野谷機工(株)

大型車用タイヤチェンジャー  
ビッグマスター  
BMT-850・1250・1250X

か。坂井良治さん(商品開発本部サービス機器開発部サービス機器二課課長)の実演デモと解説に接し、その印象を抱いた。

◆ 「BMT-850」は、大型車用タイヤチェンジャーの基幹ブランドの一つ。前モデルの「ORX」シリーズはタイヤ外径240ミリまで、TB-L

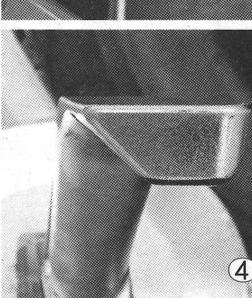
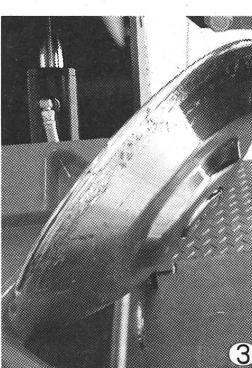
◆ その「真価」は、ビートツールに採用した新形状によって発揮される。スイッチ一つで「皿」と「レバー」が自動反転する機構はこれまでと同じ。だが

◆ 「皿」の部分は大きさやテーパーの角度を変えたことで、デリケートなビードまわりの作業性を高めた。

◆ 「グレートツール」のアーム台はオプションでの設定だった。スイッチ操作で油圧ポン

◆ ⑧「ORX」シリーズでは、操作リモコンのパネルをスイングアームと連結したことがあげられる。

◆ ⑨「ORX」シリーズは、ポータブルスタンドタイプだった。作業内容に従ってクルー操作の手がそのつどそれを移動させ作業しやすいポジションに置き、パネルを操作していた。スイッチ操作で油圧ポン



## 進化したグレートツールで作業をより確実に

◆ 最近、「シン・〇〇〇」という接頭辞を目にし耳にすることが多い。たとえば映画の「シン・ゴジラ」。その接頭辞には「真」「震」「神」といった意味が込められていると言われる。それにならえば、今回新

◆ 「BMT-850」は、ビートツールを駆使し、試作品のモニターを長期間にわたり実施しました。モニター調査はこれまで行っていますが、期間が限られ、たが、期間が限られ、ユーチャーの業種や地域に片寄りが生じることもありました。今回の開発では幅広く、多く

◆ その「真価」は、ビートツールによって、形状が異なるので、それに応じて形状を変えたことで、デリケートなビードまわりの作業性を高めた。

◆ 「皿」の部分は大きさやテーパーの角度を変えたことで、デリケートなビードまわりの作業性を高めた。

◆ 「グレートツール」のアーム台はオプションでの設定だった。スイッチ操作で油圧ポン

◆ ⑩「ORX」シリーズでは、操作リモコンのパネルをスイングアームと連結したことがあげられる。

◆ ⑪「ORX」シリーズでは、操作リモコンのパネルをスイングアームと連結したことがあげられる。

◆ ⑫